東アジアにおける越境経営の先例

―新羅坊・倭館・唐人屋敷を拠点とした国際活動と貿易―

金　　光　林（新潟産業大学）

はじめに

今回の発表では、８・９世紀頃に唐の黄海沿岸地域に形成された新羅人の居留地「新羅坊」、中世から近世にかけて朝鮮に設置された「倭館」、そして近世に日本の長崎に設置された「唐人屋敷」を比較研究することによって、朝鮮人・日本人・中国人が前近代の東アジアにおいて、国境を越えて行なった人間の移動と経済活動の具体的事実をより明らかにし、異国・異文化の中での接触と交流及び生活の様相を考察した。

一．新羅坊・倭館・唐人屋敷

（省略）

二、新羅坊、倭館、唐人屋敷を拠点とした国際貿易

唐の黄海沿岸地域に存在した新羅坊を拠点に新羅人たちは８・９世紀の東アジアにおいて最も活発な海上貿易活動を行い、その中心にいたのが新羅の商人張保皐である。張保皐は黄海・東シナ海の海上貿易を主導し、唐・新羅・日本にまたがる国際貿易を行った。張保皐は地理的にも新羅・唐・日本の交差点に位置した新羅の清海鎮に国際貿易の拠点を設置し、在唐新羅坊、日本の博多に設置した貿易拠点のネットワークを活用しながら、新羅・唐・日本に限らず、東南アジア・インド・ペルシア・アラビアとの中継貿易まで行い、扱う商品も広範囲に渡った。

日本と朝鮮の貿易は主に修好使行貿易と倭館貿易を通して行われ、貿易の形態には、進上（貢物の進呈と返礼物）、公貿易（政府指定物資の交換）、私貿易（私的貿易）の三種があり、私貿易については朝鮮政府からしばしば禁止令が出された。朝鮮との貿易を行う者は当初は足利将軍（国王使）や有力守護大名（大内・細川・山名氏など）、また九州探題、対馬の宗氏、肥前松浦氏などが派遣する使節であったが、朝鮮の倭館における日本人の反乱―「三浦の乱」（1510）を契機に、朝鮮における日本側の窓口が釜山の倭館に限定され、倭館貿易の実質的実行者は宗氏一族を始めとする対馬の人々だけになった。

朝鮮の対日輸出品には、麻布・苧布・綿布・大蔵経・高麗人参・米豆・虎皮などがあり、その中で最も大きな比重を占めたのが綿織物であった。朝鮮王朝時代を通じて少なくとも５千匹以上の綿織物が日本に輸出されたと言われる。

日本から朝鮮へ輸出されたものは、銅・鑞・金・銀・硫黄などの鉱産物と蘇木・胡椒・水牛角・龍脳・沈香・白檀・象牙・犀角などであり、蘇木・胡椒などの東南アジア産の物産は多くの場合、琉球から中継されたものであった。日本から輸入された銅は朝鮮で鋳銭の原料、器具用として使われ、一部は銅鐘などの器物に製造されて日本に再輸出された。

興味深いのは、日本側が朝鮮の綿織物と高麗人参を購入するために支給された銀が朝鮮の商人たちが中国の白糸と緋緞を購入するのに多く使用さ

れ、その中国製の白糸や絹布がまた朝鮮人の手を通して日本と交易されたことである。学者によってはこの中継交易のルートを「シルバー・ロード」とも呼んでいる。

「唐人貿易」と呼ばれる江戸時代に中国本土や東南アジア各地から来航した中国船との貿易は、主に長崎の唐人屋敷を拠点として行われた。清朝の初め頃には、遷海令により日本への渡航が禁止されたため、明の遺臣鄭氏や福建沿岸・台湾の密貿易商によって行われたが、1684年に展海令が出されたことから、江蘇・浙江二省を中心とする中国本土からの唐船の来航が急増した。このため、江戸幕府は1685年の定高（さだめだか）制を初めとして唐船の取引高や来航船数を制限した。中国側は清朝の弁銅政策に基づき、官商（有位官の特定１家）や額商（特定の民商12家）など銅の集荷商人として日本に来航し、生糸・絹織物・薬種・砂糖などを日本に輸出した。唐船貿易を通して日本から清に輸出されたのは、初期の段階では金・銀であり、後になると銅の輸出が中心をなし、他に銅器・蒔絵・伊万里・俵物などがあった。

三、異国・異文化の中での接触と交流及び生活

新羅坊・倭館・唐人屋敷は、それぞれが異国の中に設置されたため、前近代の東アジアにおける異国・異文化の中での接触と交流及び生活の様相を伝えている。

新羅坊・倭館・唐人屋敷について調べると、まず目に付くのが異国の中に自分たちの文化、自民族の文化を濃厚に持ち込んでいたことである。

新羅坊・倭館・唐人屋敷の事例から、受け入れ側の事情により異国人を一定の地域に限定して居住させる側面がもちろんあるが、前近代にも、近代・現代にもほぼ共通している事実は、異国で生活する場合、同族同士の集団で居住し、自分たち、自民族のコミュニティーを形成することが多いという点である。前近代においても民族同士の異質性を自由に乗り越えることは難しかったとみられる。

一方、こういう拠点を通して異国で生活していた人々は、前近代の東アジアの世界において、常に国家と民族の境界を跨ぐ存在であり、民俗学でいうマージナル・マン（境界に生きる人間）の性質を備える場合が多かった。

新羅坊・倭館・唐人屋敷はそれぞれ異国の中の存在であり、そこを拠点に異文化間の交流がなされた事実も注目に値する。

新羅坊・倭館・唐人屋敷は異国の中の異質な存在ではあったが、漢文化・仏教など共通の文化的要素を持ち、民族的・地理的にも近い関係にある東アジア諸国の中の存在であったために、近世の西洋からのキリスト教伝来に見られるような深刻な文化摩擦を引き起こすようなことはなかった。

むすび

以上、概略的ではあるが、新羅坊・倭館・唐人屋敷を同じ土台の上に載せて考察してみたことは意味があると思われる。

新羅坊・倭館・唐人屋敷は前近代の東アジアの世界における確かな越境経営の先例であり、そこを拠点に異文化間の交流が行われ、そこの住民たちは国家と民族の間の境界に生きながら、国家的次元とは異なる人間的ネットワークを活用し、国際活動と貿易を行うことが多かった。

COMMENT

渡　部　育　子（秋田大学）

アジアにおける共通の歴史認識や“地域の共生”が問題になっているなかで、前近代越境経営の先例として新羅坊・倭館・唐人屋敷を取り上げた本報告は時宜を得たものである。経済交流も含む外交は国家の管轄下にあったにもかかわらず、人とモノの交流は、地域と地域の間で（民間レベルで）行われていた。本報告は遣唐使のルートともなる環日本海地域の南半分の地域に焦点を合わせて論じた。これは日本古代における外交のメインルートである。

一方、日本古代国家にとって北からのルートも重要な意味をもっていた。そこで、渤海使に見られる大陸と出羽地域の交流と国家の対応に注目したい。

8世紀、渤海使の多くは越後・佐渡・出羽に到着する。それは国書を携えた外交使節だけではない。天平18年（746）には1100人の渤海・鉄利人が帰化を求めて来着した。政府は帰化は認めなかったが、彼らを出羽国に安置し、衣服と食糧を与えて放し還すよう命じた。当時、秋田よりも北の地域には律令的支配は及んでいなかったから、彼らが日本列島北部地域に留まることも可能であった。

実は、すでに6世紀、欽明天皇5年（544）には粛慎人が佐渡に長期滞在していることが知られる。また、養老4年（720）には渡嶋津軽津司従七位上諸君鞍男ら6人を靺鞨国に遣わして、その風俗を観させた。9世紀、延暦21年（802）には渡嶋の蝦夷が朝貢する特産物を出羽国内で私的に交易することを禁じる命令が下されている。すなわち、環日本海の人々、各地域は“共生”し、日本海は交流の道としての役割を果たしていたのである。

【参考文献】

渡部育子「陸奥・出羽・越後の国支配」（『日本海域歴史大系』第1巻、清文堂、2005年）